

トイレトペーパー不使用の受容

頭を空っぽにしてから、想像してみしてほしい。

洋式トイレの個室で大きなほうを出した後、

「ととと、トイレトペーパーが無いっ！？」

という状況に陥った場合、あなたならどうするだろうか。

くわえて、代わりに使えそうな物を持ち合わせていないものとする。

これがいかに残念であるかは、殊更に言うまでもない。

『そんなの急に聞かれてパツと思いつくかっ！』とお思いの方が大半を占めているであろうことを予測して、参考になりそうなヒントを出しておく。

たとえば一介の男子高校生——佐伯徹（さえき とおる）なら、こうするのである。

※

「ありえねえだろおおおおお——！！」

高校の体育館裏。

強烈な異臭をただよわす寂れたトイレ——通称サビレに、佐伯徹の絶望が高らかに鳴り響いた。

あっ……この声を聞いた奴がやって来たりでもしたら、まずくね？ この状況を知られたら、俺の高校生活笑いものにされて、終わりじゃね？

開いた口を慌てて閉じる。

同時に、全身から血の気が引いていくのを感じた。

この醜態を誰かに気取られでもしたら、平凡男子キャラは音を立てて崩壊するに違いない。

短いようで長い十秒間を、息を止めてサビレと一体となってやり過ごす。

誰かが来る気配はない。

とめていた息がどっと出る。

「ま、マジかよー。違うよな？ このクソみたいな状況は、なにかの間違いなんだよな？」

佐伯徹は声をひそめて自身にいい聞かせる。

「れ、冷静になれ。サビレ臭に惑わされるな！ ……そ、そうだ。そうだよ、ふはははっ！ なんで俺はこ

んな当たり前のことを確かめずに、うろたえていたんだ!？」

沼に沈んでいく者がたまたま藁をつかんだら、その一瞬にかぎり、きっとこんな顔をするのだろう。

佐伯徹は便座に腰をおろしたまま、腰を捻り、右背後！左背後！と狭い個室の中を満遍なく見渡した。

「きっとこの個室のどこかにっ！トイレットペーパーのストッ！クが……」

——うん……なかった。

「れれれれっ、冷静になれ！違う、違うんだよ。俺にかぎって、こんなことになるはずがないんだ。神様だってきっと、日ごろの行いの善い俺をそう易々とは見放さないはずだ！」

なあ、そうだろ？神をあおぐつもりで天井を見上げる。

しかし、サビレに神などいるものか。いるのは、すっかり薄小麦色に黄ばんだ蛍光灯の放つ光を好む蛾くらいである。

「ちっきしょー！どうして俺がこんな目につ!？」

思えば、幼馴染の野中藍（のなか あい）から手渡されたバレンタインデーチョコを食べて、すべては始まった。

「本当だったら今ごろ俺は、良子と人生初のいちゃラブメールをやりとりしていたはずなのにっ……

むう！野中め、あいつだけは許せん！」

※

たかだか二十分前までの佐伯徹は、表紙に『結城良子（ゆうき りょうこ）より』と書かれたラブレターを持って、約束の放課後に約束の体育館裏で、はやる気持ちをぐっところえつつ待ち惚けていた。

ピンク色のラブレターに詰まった自分への熱い想い。

好きではじまり大好きで締めくくられた内容は、佐伯徹がここ一年間ほど求めても中々手に入らないものであった。

結城良子の細くてやわらかそうな手を握りたいがために、登下校はできるだけ一緒になるようタイミングを合わせてきた。

結局、握れることはなかったが。でもそれは、清楚で恥ずかしがり屋な結城良子ならではの照れに違いなかった。

授業の合間や昼食の時間は、無理やりにでも話のネタを作って話しかけてきた。

その都度、結城良子の眉をひそめて立体的な唇を引き締める仕草に、佐伯徹は自分が誘われているかの

ような気分を味わった。

結局、まともに話せたことは業務に関する連絡事項くらいだった。でもそれも、好きな人の前では正常でいられない結城良子ならではの照れのせいに違いなかった。

しかし、どれもこれもなんてことはない。

恥ずかしがり屋の結城良子とついに、ついに結ばれる日がやってきたのだ！これで年齢＝彼女暦無しとおさらばである。

——おさらばになる、はずだった。

体育館の角を曲がってやって来た女子生徒は、佐伯徹がイメージしていた人物とは、およそ対極に位置する相手であった。

「な、なんでよりもよって、お前がここに？」

細身な体の天辺で盛りあがっているポニーテイルをゆっさゆっさとゆらしながら現れたのは、制服をきちっと着こなした幼馴染の野中藍である。

その怪訝そうに下唇をぬっと突き出す姿は、侍が「どうして私が買出しに行かなきゃならんのだ！」と不服そうに歩いているかのようである。

「手紙は読んだな」

一閃のごとく声は、女とは思えないほど低くて愛想がない。

「ああ……読んだけど」

ここにいるのが愛しの結城良子ではなく野中藍である意味が分からない。

動揺が音声から悟られないよう注意したが、その分、注意がそれた顔のほうに困惑の色がのってしまう。

「なにその面は。その歳で情けない表情しないでくれる？……みっともない」

トゲのある返しだ。理不尽極まりない。

「ふん！」

けれど悲しいかな、野中藍には口論で勝てたためしがない。

情けない顔で悪かったな！そう口には出さず、あえて顔全体を引き締めて対抗する。

言葉ではなく態度でつくろった佐伯徹を、野中藍は気だるそうに微笑一つで受け流した。

「これ、リョウから」

ぶっきら棒に紙袋を突き出される。

中からほのかに甘いチョコの香りがした。

ちなみに、リョウとは結城良子のニックネームである。野中藍と結城良子は仲が良く、よく「おはよリョウちゃん」「おはようアイちゃん」などと呼び合っているのを、佐伯徹は盗み聞きしてきたので当然のように知っている。

佐伯徹はひらめいた。

「これって……、ああ！そういうこと？」

良子のことだ、手紙で俺を呼び出したはいいが、寸前になって恥ずかしくなったのだろう。

だから代わりに、親友である野中がチョコを渡しにやって来たのだ。うんうん、納得だ。

大丈夫だよ、良子！受けとった手紙から、君の気持ちは痛いほど良く伝わってきているから。これからすこしずつ、お互いの距離を縮めていこうじゃないか！

「デレデレすんな、キモい」

「う、うるせえ」

野中藍から紙袋を乱暴に受けとる。

中に手を突っ込み、ハート型の赤い包装紙につつまれた物を取り出した。

汚く破けないよう慎重に、慎重に、くれぐれも破けてしまわないように、そ〜っと、包装紙を指ではずしていく。

この先に良子のチョコが……。落ち着けとは思うものの、胸を締めつけるほどの興奮が、繊細な動きを必要する指先をふるわせる。

「はあ、はあ、念願の良子のチョコ……はあ、はあ」

「ここで食っていけよな。——あんたなら、墓場まで食わずに持っていくとかいいかねない」

っち！野中が側にいるせいで、せっかくの気分が台無しだ……。

「雰囲気壊れるから黙ってくれよ！つか、なんでお前に一々指示されにやらなんのか」

「食べなきゃ、あんたの恥ずかしい過去をリョウにばらす」

「な、なにをっ！？」

佐伯徹はあからさまに顔を引きつらせた。

それを確認してからか、「あれはそう」と野中藍は遠くの景色に眼差しをうつして続ける。

「小一の春、体育館で校長先生の話聞いていたときにお漏らしをした。同じく小一の秋、遠足にバナナの束——およそ十本つきを持ってきて皆に笑われた。小二の冬、雪に足を滑らせて転び、どさくさに

紛れて私のズボンを」

「待て——い！ 食うよ？ 俺、マジでここで今すぐ食うよ？ だからやめて。お願いだから淡々と語らないで！ それ以上ほじくり返されると、目から切なさや羞恥心のカケラがこぼれ落ちちゃうからっ」

すがりつこうとする手を野中藍は反射的に払いのける。

「きゃっ！？ なにすんの、近よるな！ ——こっからが面白いのに……」

「頼む！ 良子にだけはそのことは……」

「理解したのならいいわ」

「た、助かった？ しかし、本当ならここは流利的に、良子と綺麗な夜景が一望できるレストランで、微笑を交し合いながら、ワインを片手に——」

「早く食えよ、面倒くさい。未成年だろうが。やっぱバラすか」

「くそ、感動もろくに味わえないのかよ……」

渋々、佐伯徹はやっとこさ箱を開けて、期待した通りの可愛らしいハート型のチョコを指でつまみ、口に運んだ。

パクッ！

うう～、トロける～美味い～ヤバイ～。おお神よ、俺を存在させてくれてありがとう！ 今この瞬間なら、俺は死んでも構わない！

うげっ！？ 口に入れた瞬間、べちゃべちゃに潰れる新食感！ もう少し歯応えを味わいたかったけど、これはこれで儚い感じが出ててよい。

うひょっ！？ 味覚を支配する強烈な酸味！ 隠し味にレモンでも入れたのかな？ にしてもすこし入れすぎな気もするけど、良子のチョコなら無問題。

「だ、だいじょうぶ？」

恐る恐るといった感じで野中藍が顔を下からのぞき込む。

「だいひょうふだっへ！？ そんなの、だいひょうふにきまつへるやろ！」

この唯一にして無二のチョコの良さは、実際に食べた者にしか理解できない。

素晴らしい、これこそ完璧なチョコレイトーだ！

たとえ泥でできたチョコだろうと、そこに秘められた付加価値がすべてを至高の代物へと昇華する。

野中藍はそれを見てホッとしたのか、心配気な顔をすこしゆるめた。

「良かったね。そういえば、リョウが紙袋と包装紙のゴミは渡すのも悪いから預かるって言ってた」

「そうか、ちょっと残念だけど、良子が言うなら仕方ないな」

後ろ髪を引かれる思いをこらえて、持っていた紙袋と箱などのゴミを手渡す。

野中藍はさらに顔をゆるめた。初見の怪訝さは微塵ものこっていない。ニッコリと微笑んでいるようにさえみえる。

「いっとくけど、そのチョコは義理チョコなんかじゃないからね」

「当たり前だろ？ そんなの食べれば分かるっつーの。常考だろ」

「じゃあなにチョコだと思う？」

「は？ 義理じゃないんだから……ふは、ふはははははっ！ 本命に決まってんだろ。なんだーお前、俺の
ほうが先に春が来たから妬んでんのか？ ドンマイドンマイ！ お前にもいつか、良き理解者ができるっ
て。——たぶんな。ふは、ふは、ふはははははっ！ ……は、ん？」

ギュルルルルと、佐伯徹のお腹が豪快になった。

「今、俺のお腹様が、ギュルルルっていわなかった？ なあ、ギュルルってなかった？」

「正解はゲリチョコでしたー、あはははははー。下剤をふんだんに入れてあるのでしたー」

野中藍は嬉しそうに棒読みでいった。まるで興味のないことを、いわなければならないから調子を合わせて仕方なくいったかのように。

「ゲリチョコ？ What？ なにそれ。Why？ なぜにゲリ？」

※サンプルはここまでとなります。